

# 血液内科病棟で使用しているパンフレット内容の検討のためのアンケート調査

キーワード：血液疾患・化学療法・パンフレット指導

1 病棟 10 階東

倉田志保 高濱英子 松本麻里 吉松祐香 三吉千恵 村田三代子 藤里美子

## I. はじめに

A 病院血液内科病棟（以下 B 病棟）では、化学療法を受ける患者に対して、治療開始時に医師が説明を行い、看護師は B 病棟で作成した独自のパンフレットを用いて化学療法の副作用とその対応策について説明をしている。しかし、実際には化学療法開始後も患者から、「今自分が何をすべきなのか分からない」、「この副作用はどのくらいの頻度で起こるの」などの質問や不安な発言を聞くことがあり、パンフレットに患者の知りたい情報が不足しているのではないかと考えた。

婦人科疾患患者を対象にした化学療法のパンフレットの評価と患者の求める情報・情報源の実態調査では、婦人科疾患患者は知りたい情報により情報源を使い分け、パンフレットは医師や看護師の情報提供と合わせることで患者の不安を軽減する役割を果たしていることが明らかになっている。しかし、血液疾患患者を対象にした研究は行われていない。

そこで、化学療法を施行された血液疾患患者を対象に、知りたい情報や情報源とパンフレットの活用状況を調査し、パンフレット内容の検討を行ったので報告する。

## II. 目的

患者が知りたい情報、情報源とパンフレットの活用状況を明らかにし、パンフレット内容の検討を行う。

## III. 研究方法

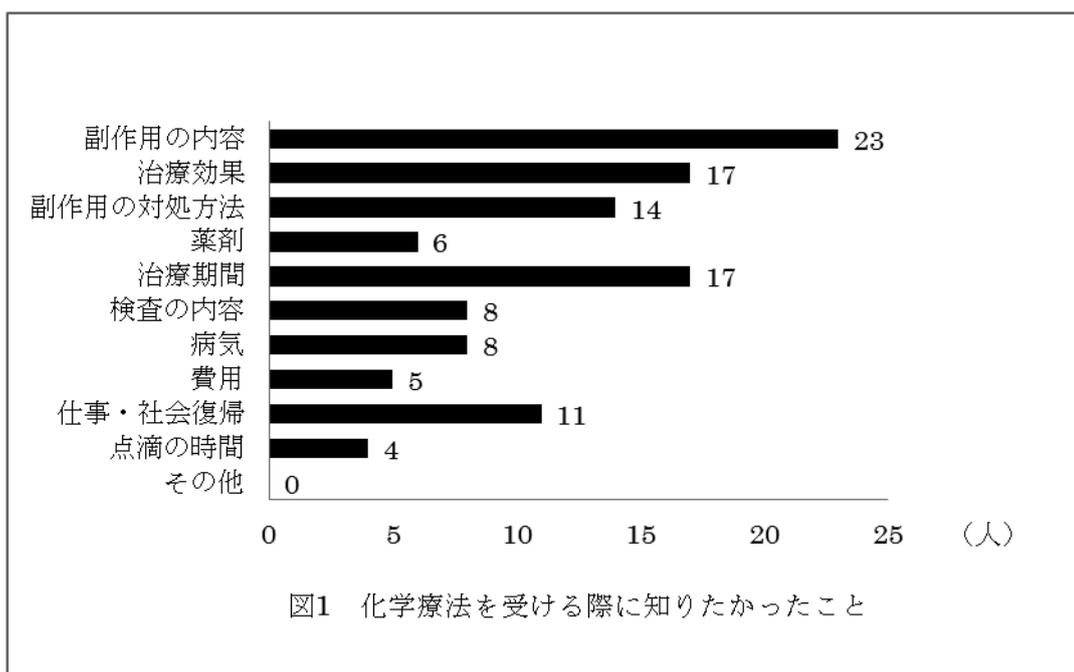
1. 対象者：平成 20 年 1 月 1 日～平成 25 年 8 月 31 日に悪性リンパ腫または白血病との診断を受け、B 病棟で化学療法施行前にパンフレット説明を受けた患者 25 名。
2. 調査期間：平成 25 年 11 月 1 日～11 月 30 日
3. 方法：先行文献を参考に作成した独自のアンケートを用い、対象者に本研究の趣旨と目的、内容を事前に口頭で説明し、個人を特定できない無記名式アンケート調査を行った。
4. 分析方法：データは単純集計し、現状の分析を行った。
5. 倫理的配慮：IRB で承認を得た文書を用いて説明し、同意を得た。その文書には、研究の目的と意義、及び無記名調査であること、得られたデータはこの研究以外には用いないこと、研究への参加は自由意思であることを明記した。

## IV. 結果

アンケート調査の回収率は 100%で、有効回答率は 96%（24 名）であった。年齢構成は「20 代」8%、「30 代」16%、「40 代」24%、「50 代」20%、「60 代」24%、「70 代」8%であった。

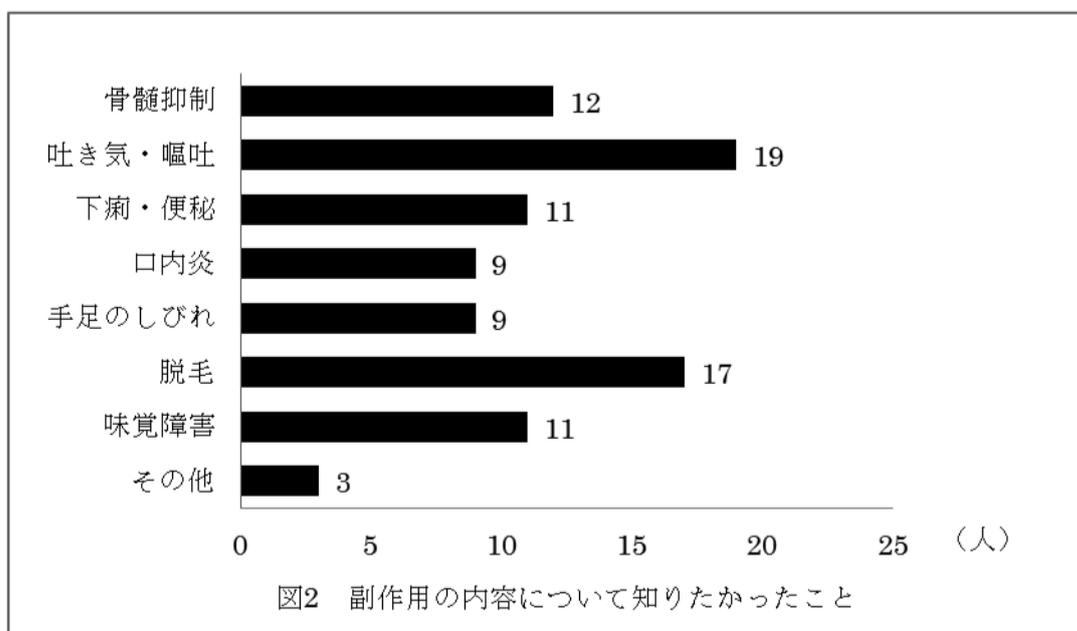
### 1. 化学療法を受ける際に知りたかったこと（図1）

＜化学療法を受ける際に知りたかったこと＞は、「副作用の内容」が23人と一番多く、次いで「治療効果」「治療期間」が17人、「副作用の対処方法」が14人であった。



### 2. 化学療法の副作用の内容について知りたかったこと（図2）

＜化学療法の副作用の内容について知りたかったこと＞は、「吐き気・嘔吐」が19人と一番多く、次いで「脱毛」が17人、「骨髄抑制」が12人であった。



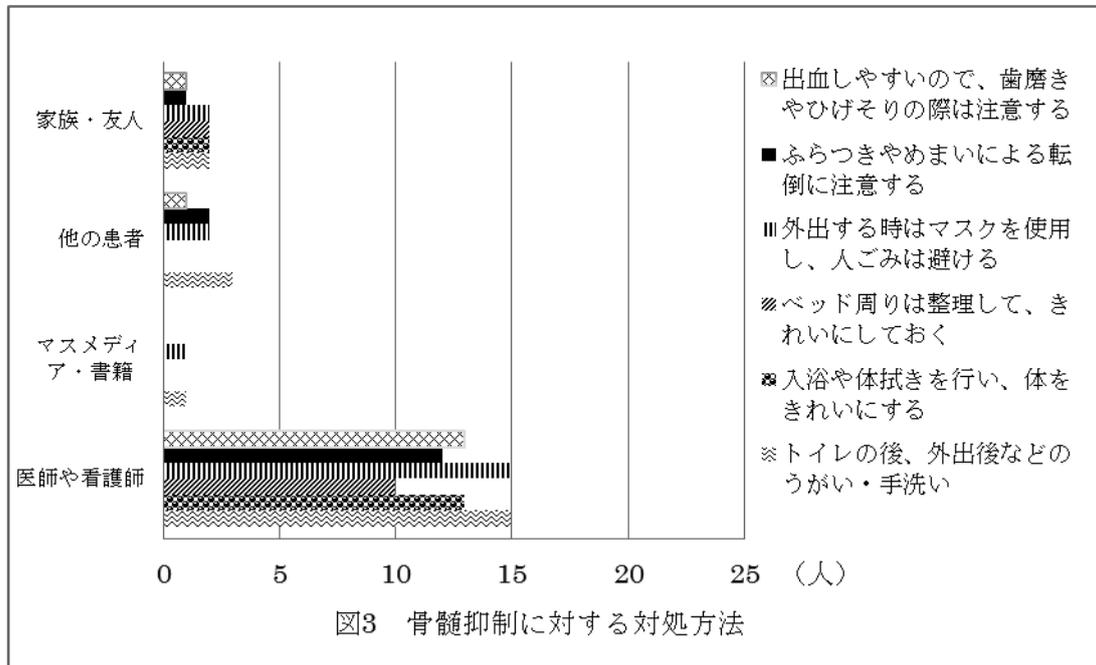
3. ＜パンフレットを読んだ回数＞については、「説明のときのみ」24%、「2～3回」56%、「3～4回」12%、「5回以上」8%であった。

4. ＜パンフレットに知りたいことが載っていたかどうか＞については、「はい」96%、「いいえ」4%であった。また、自由記載欄には「カラーリング・パーマの説明がほしい」や「味覚がなくなったら、どうすればいいか詳しく説明してほしい」との意見があった。

5. 副作用の対処方法についての情報源の実態

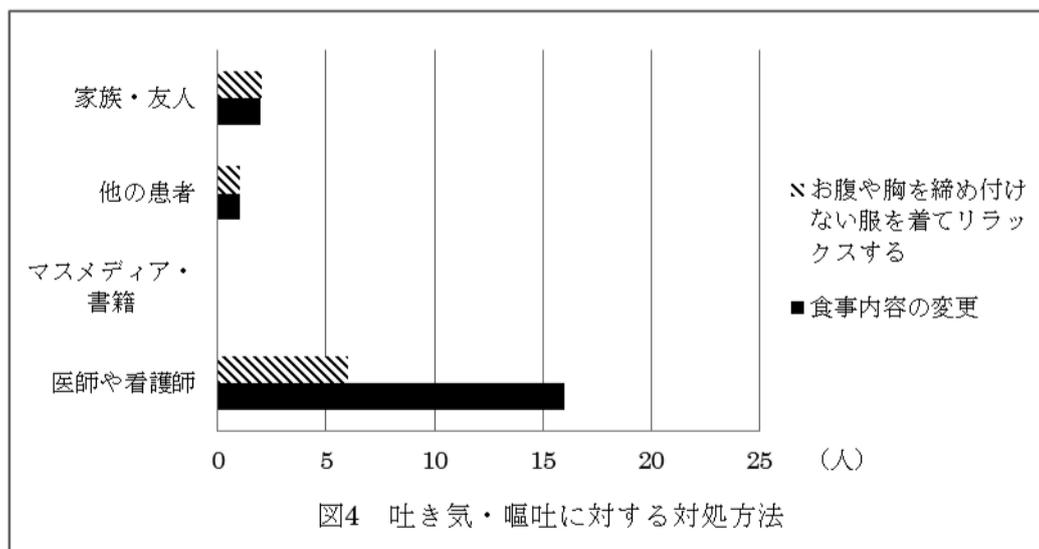
(1) 骨髄抑制に対する対処方法について (図3)

全ての項目で「医師や看護師」が一番多く、次いで「家族・友人」「他の患者」であった。



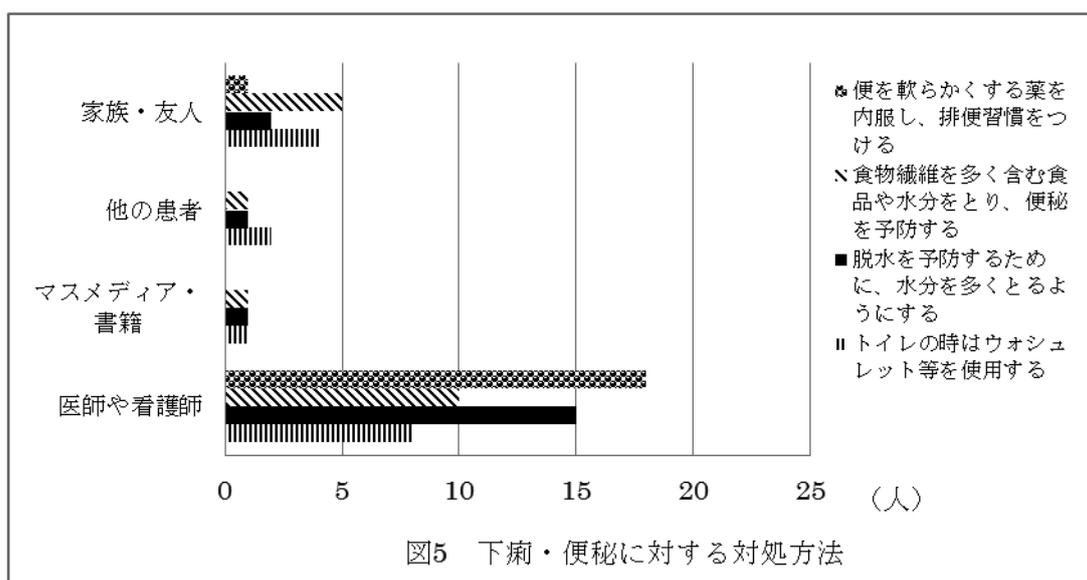
(2) 吐き気・嘔吐に対する対処方法について (図4)

全ての項目で「医師や看護師」が一番多く、次いで「家族・友人」「他の患者」であった。「マスメディア・書籍」はなかった。



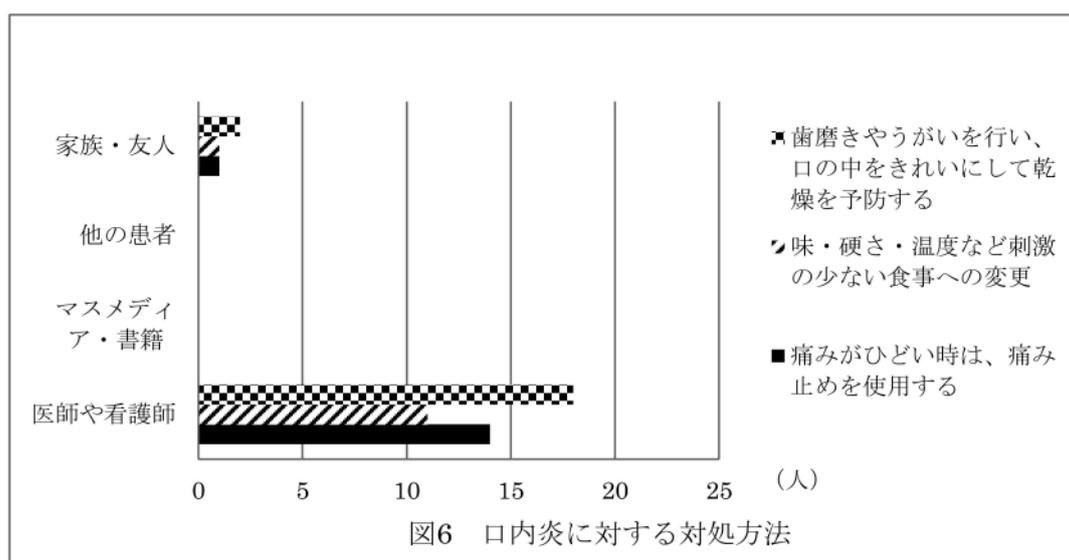
(3) 下痢・便秘に対する対処方法について (図5)

全ての項目で「医師や看護師」が一番多く、次いで「家族・友人」「他の患者」であった。



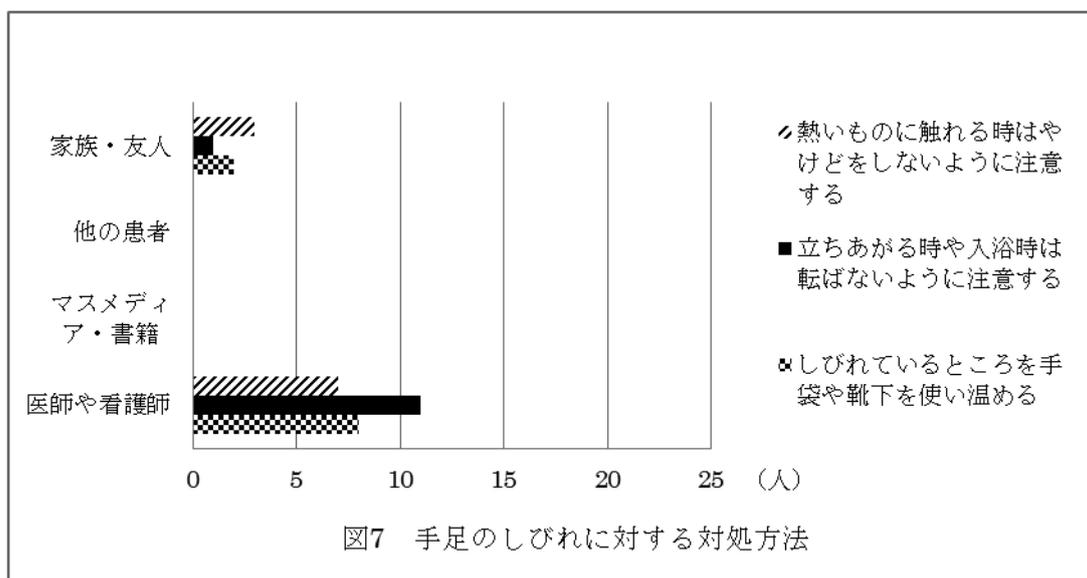
(4) 口内炎に対する対処方法について (図6)

全ての項目で「医師や看護師」が一番多く、次いで「家族・友人」であった。「他の患者」「マスメディア・書籍」はいなかった。



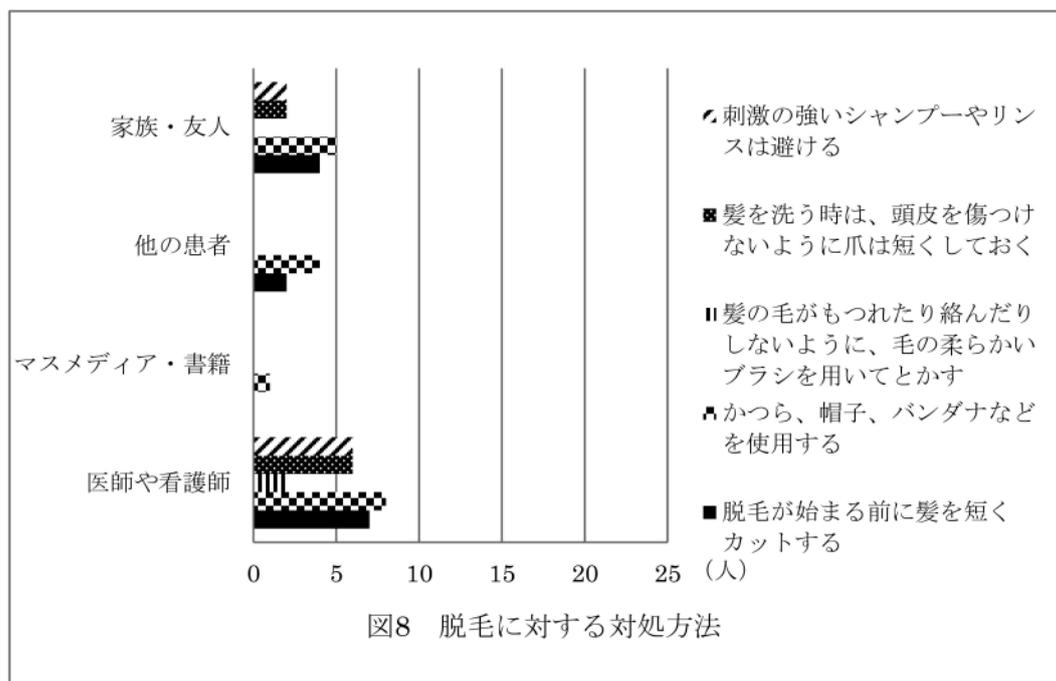
(5) 手足のしびれに対する対処方法について (図7)

全ての項目で「医師や看護師」が一番多く、次いで「家族・友人」であった。「他の患者」「マスメディア・書籍」はいなかった。



(6) 脱毛に対する対処方法について (図8)

全ての項目で「医師や看護師」が一番多く、次いで「家族・友人」「他の患者」であった。



## V. 考察

化学療法の際に知りたかったことについては「副作用の内容」が一番多く、これはパンフレットに記載されている内容であった。患者が知りたい情報である「副作用の内容」や「副作用の対処方法」はパンフレットに記載されていたが、より多くの患者のニーズに沿えるよう、記載されていなかったカラーリング・パーマの時期や「治療期間」「費用」「仕事・社会復帰」についても今後パンフレットに追加していく必要があると考える。

また、患者がパンフレットを読んでも実際に行動に移せず、症状が悪化するケースもある。副作用の対処方法の情報源は医療者が多いことから、患者に統一したケアが行えるようにパンフレットを有効に使用していく必要があると考える。看護師の役割としてパンフレットを患者と一緒に繰り返し読み、患者の理解度や実施状況、不安な点の確認を行い、状況に合わせた対処方法を具体的に説明し、患者のセルフケア能力を高めることも大切であると考えられる。

## VI. 結論

1. 患者が化学療法を受ける際に一番知りたかったことは「副作用の内容」に関することであり、化学療法による副作用に患者自身が対処できるようなパンフレットにする必要がある。
2. 現在使用しているパンフレットには患者の知りたい内容が記載されていた。しかし、ボディイメージの変化に対する内容や「治療期間」「費用」「仕事・社会復帰」についての情報が欲しいというニーズもあり、パンフレットに追加していく必要がある。
3. 情報源の多くは医療者であることから、効果的なパンフレット指導とともに、精神的な介入も行う必要がある。

## 参考文献

- ・ 大都葉子, 秋山千恵, 江幡麻理子: 化学療法オリエンテーション用紙の評価と課題—患者の求める情報と情報源の実態—, 第36回日本看護学学会論文集 (成人看護Ⅱ), 196-198, 2005.
- ・ 峯島和江, 菅原美穂, 藤川マヤ: 血液疾患患者が病棟看護師に求める関わりの検討, 第39回日本看護学学会論文集 (成人看護Ⅱ), 12-14, 2008.
- ・ 荒井慶子, 場家豊美, 浜田園子: 化学療法を受ける患者の思いを知る, 第33回日本看護学学会論文集 (成人看護Ⅱ), 114-116, 2002.
- ・ 出口久美子, 稲守直子, 仲美保: がん化学療法を受ける患者のQOLの認識と看護介入, 第32回日本看護学学会論文集 (成人看護Ⅱ), 150-152, 2001.
- ・ 岩瀬薫, 浅井千佳, 矢萩節子, 浦山礼子: はじめて化学療法を受ける患者の心理とその援助, 第32回日本看護学学会論文集 (成人看護Ⅱ), 153-155, 2001.